

平成9年「国際協力の日」記念国際シンポジウム

# 「ひとの役に立つということ」

～国際協力の原点を探る～



*International Symposium in Commemoration of  
International Cooperation Day 1997*

JICA LIBRARY



J 1141711 (0)

主催 国際協力事業団(JICA)  
海外経済協力基金(OECF)

JICA  
000  
36  
K  
BRARY







1141711 [0]

# 平成9年国際協力の日 記念国際シンポジウム

International Symposium in  
Commemoration of International  
Cooperation Day 1997



## シンポジウムの概要

平成9年10月6日、国際協力事業団と海外経済協力基金は、有楽町朝日ホール（東京都千代田区）において、平成9年「国際協力の日」記念国際シンポジウムを開催いたしました。

この国際シンポジウムは、10月6日（昭和29年のこの日、日本はコロンボ・プランに加盟し、政府開発援助を開始しました）の国際協力の日を記念して開催されたもので、多数の市民の方々、NGOや学生の方々、内外の国際協力の関係者など延べ589人の参加を得て、国際協力の日にふさわしい、意義ある催しとなりました。

## テーマ

### ひとの役に立つということ ～国際協力の原点を探る～

10月6日が「国際協力の日」に制定されて、今年で10周年。開発途上国への国際協力の分野では今日、政府開発援助（ODA）に加えて、市民によるNGOの国際的な協力も活発化しています。

私たちは地球市民の一人として、世界中で様々な困難に直面した人々に対して何ができるのか。「ひとの役に立つということ」の意味を探ることを通じて、いま国際協力を支える人たちの、「共に生きよう」という想いとは何かについて考えます。



## 目 次

プログラム .....	3
開会挨拶	
国際協力事業団総裁    藤田 公郎 .....	4
海外経済協力基金総裁    西垣 昭 .....	5
メッセージ	
内閣総理大臣            橋本 龍太郎 .....	6
外務大臣                小淵 恵三 .....	6
経済企画庁長官          尾身 幸次 .....	7
パネリスト紹介 .....	8
パネル・ディスカッション .....	9

後援／ 総理府  
外務省  
経済企画庁  
大蔵省  
農林水産省  
通商産業省  
日本放送協会  
朝日新聞社

協賛／ (財) 日本国際協力センター  
(財) 国際協力推進協会  
(財) 日本国際協力システム  
(財) 国際開発高等教育機構  
国際開発学会  
(株) 国際開発ジャーナル社



## プログラム

●テーマ 「ひとの役に立つということ ～国際協力の原点を探る～」

■開 会 (14:00～14:10)

開会挨拶

国際協力事業団総裁

藤田 公郎

海外経済協力基金総裁

西垣 昭

■パネル・ディスカッション (14:10～17:00)

[コーディネーター]

NHKアナウンサー

黒田 あゆみ

[パネリスト/ファーストスピーカー]

ドゥアン・プラティープ財団事務局長 (タイ)

プラティープ・ウンソンタム・泰

(スラムの生活改善に取り組むNGO代表、マグサイサイ賞受賞)

[パネリスト]

老人保健施設すこやか苑職員 (元青年海外協力隊員)

奥田 真由美

さわやか福祉財団理事長・弁護士

堀田 力

チュラロンコン大学経済学部助教授 (タイ)

カムチャイ・ライスミット

慶應義塾大学総合政策学部教授

草野 厚

(発言順)



国際協力事業団総裁  
藤田 公郎

本日はお忙しい中「国際協力の日」記念国際シンポジウムにご参加いただき、誠にありがとうございます。ただいま司会の方からご紹介のありましたとおり、43年前の今日、日本は政府開発援助（ODA）を開始し、その意味で本日10月6日は日本の国際協力の誕生日と言ってよいと思います。誕生以来、日本の国際協力は量的にも質的にも着実に成長してきました。困難に直面したり、試行錯誤を繰り返しながらも、これまで多くの開発途上国の社会経済発展を支え、いまやリーディングドナーとして世界の平和と発展に貢献をしております。

その中で私ども国際協力事業団（JICA）は、「人づくり、国づくり、心のふれあい」を合言葉に、途上国の国造りの基礎となる人材の育成に力を注いでおります。今日この時にも、JICAから派遣された青年海外協力隊員や専門家など約5,000名が、途上国の現場で汗を流しております。彼らの一人ひとりが「顔の見える援助」の実践者であり、日本と世界をつなぐ架け橋となって日々活躍をしております。

先日、私も中米4か国の協力現場を訪問しましたが、専門家や協力隊員の方々が、日本とは条件や環境の異なる中で苦勞をしながら、現地の人々の生活に溶け込み、相手国の技術者と互いに切磋琢磨している姿が強く印象に残りました。「教えることよりも教えられることの方が多かった」、「人生観が変わった」。これらは多くの協力隊員や専門家の方々の言葉です。これは人と人とがふれあう中で、国境も、民族も、宗教も越えて、この小さな地球で共に生きることを学び、対等なパートナーであることを実感した言葉だと思います。地道で時間のかかることですが、これら一人ひとりの努力と信頼関係の積み重ねが、結局、国と国との良好な信頼関係の

土台となっているのではないかと確信しております。

また、最近では政府間協力に加えて、NGOや地方自治体の国際協力への取り組みも本格化してきています。市民参加の国際協力がますます活発化し、国という枠を越えて市民が直接海外の方々と積極的に関わるようになってきました。政府の協力、NGOなど民間の協力、国際協力への参加の形は様々でも、それを支える思い、目指すゴールは同じであると思います。JICAとしても一層NGOや自治体との連携の強化に努め、徐々に実績を積みつつあります。

今年の「国際協力の日」記念国際シンポジウムでは、国際協力の原点とも言える、「ひとの役に立つということ」、「助け、助けられるということ」あるいは「共に生きること」の意義を、パネリストの皆様、そして会場の皆様と共に考えていきたいと思っております。

ここに、皆様の積極的なご参加をお願いして、ご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。



海外経済協力基金総裁  
西垣 昭

本日はお忙しい中ご出席いただきまして、誠にありがとうございます。かくも多数の方々のご参加を賜り、本シンポジウムを開催できますことは、主催者の一人として嬉しい限りであります。

現在、日本は国内総生産(GDP)では米国に次いで世界第2位の経済大国ですが、貿易、エネルギー等様々な面で対外依存度が高い国となっています。このことは、我が国の平和と繁栄のためには、平和的な国際関係の維持が不可欠であるということを示しています。そのため、日本としては対外的関係を重視し、国際貢献の柱として、経済的協力を実施していくことが国際社会からも期待されております。そうした状況の中、我が国は厳しい財政事情においてもこれまで政府開発援助(ODA)を着実にのばし、世界のODAに占める日本の地位は、1960年代においては第5位であり、経済協力開発機構(OECD)の開発援助委員会(DAC)の中におけるシェアも5%程度でありましたが、1990年代には第1位となり、そのシェアも約20%を占めるまでに拡大しました。この内、日本のODAの中でその割合が高いことに特色がある有償資金協力、すなわち円借款は、私ども海外経済協力基金(OECF)が実施しており、これまで開発途上国85か国を対象に、約16兆円の円借款契約を締結して参りました。この結果、日本からのODAが最大である途上国は55か国。その中で海外経済協力基金からの有償資金協力だけを取り上げても最大となっている国は、約20か国となっています。

現在、世界の人口の約8割が、援助を必要としている開発途上国では、その人口規模はますます増えていますが、他方、援助する側の人口はそれほど増えていません。従いまして、できる限り効率的な援助を行って、自立できる国を増やしていく必要があります。日本も第二次大戦後、米国や世界銀行からの支援を受けながら、

自助努力の精神に基づいて戦禍で疲弊した国土を再建し、経済成長を遂げてきました。この経験を踏まえ、開発途上国の自助努力を支援し、最終的に援助を受けなくとも自国の開発を促進していけるように協力していくことが、我が国の援助の基本であると考えます。

こうした「自助努力の支援」という理念の下、海外経済協力基金は、1966年以来30年以上にわたり、アジア地域を中心に、円借款を通じて、運輸、電力等の経済インフラから、上下水道等の社会的インフラまで、様々な分野の開発に大きな役割を果たしてきました。円借款はその長期、低利資金という特徴から、開発途上国の経済社会インフラ整備を支援していくことに適しており、そのための資金需要は今後とも増大していくことが予想されています。また、開発途上国の経済発展に伴い、環境の悪化が懸念されていますが、伝統的なインフラ整備に加えて、こうした環境問題の改善に関しても、海外経済協力基金への期待は高く、我々の果たすべき役割は、ますます大きくなっていくものと思われます。

先進国の援助疲れが指摘される昨今、本シンポジウムが我が国の国際協力のあり方について皆様と共に考える良い機会となることを期待しております。そして本シンポジウムの成果については、私どもの今後の活動に生かして参りたいと考えております。

最後に、本シンポジウムの開催にあたりまして、ご協力いただきました関係者の方々に対し、心より御礼申し上げますとともに、本日の記念行事が、皆様に国際協力についてご理解をいただく一助となることを祈りつつ、私の挨拶を終わらせていただきます。

どうもありがとうございました。



内閣総理大臣  
橋本 龍太郎



外務大臣  
小淵 恵三

本日は我が国の経済協力の歴史にとって記念すべき日であります。我が国は今を遡ること43年前の本日、コロンボ・プランに加盟することにより、政府ベースでの経済協力を開始しました。また、その日に因んで、政府は経済協力に対する国民的理解の増進を図る観点から、昭和62年9月の閣議了解にて毎年10月6日を「国際協力の日」と定めましたが、本日がその10周年に当たります。

我が国の開発途上国に対する政府開発援助（ODA）は、昭和29年の開始以来、質量ともに飛躍的に充実し、現在では世界最大規模の援助国として約160の国と地域に対し協力をを行い、高い評価を受けるに至っています。

本日で国際協力の日が設定されてちょうど10年という節目を迎えますが、この間、国民の国際協力に対する関心は大きく高まり、地方自治体やNGOの国際協力活動も活発化してきております。今回のシンポジウムが国際協力の原点を探るとの観点の下に行われることは、大変時宜を得たものと言えましょう。特に、現在の極めて厳しい財政状況の中にあつて、我が国がより良い21世紀の実現のために引き続き積極的な国際貢献を行っていく上で、国民の皆様の国際協力に対する理解と支持は必要不可欠です。本シンポジウムでの議論を通じ参加者の皆様一人ひとりが改めて国際協力の意義を再確認し、もって我が国の国際協力活動が全国的広がりをもつものとなるよう祈念しております。

国際社会の相互依存関係がますます深化する中にあつて、国際社会に対し積極的な貢献を行うことは、我が国の果たすべき重要な責務であります。中でも、政府開発援助（ODA）は、我が国が成し得る貢献の最も重要な柱であります。

他方、我が国のODAを巡る内外の情勢には厳しいものがあることも事実です。途上国では依然として深刻な貧困の問題を抱え、環境、人口・エイズ、難民といった地球的規模の諸問題も深刻化しています。こうした問題の解決のために途上国への経済協力は決定的な重要性を有していますが、現実には先進国からの援助と途上国の開発資金需要のギャップは拡大しています。

また、国内的には、厳しい財政状況の中にあつて、ODAについてもこれまで以上にその効率的・効果的实施が求められ、ODAのあり方について様々な見直しを行うことが必要となっております。外務省でも本年4月に「21世紀に向けてのODA改革懇談会」を設け、各方面からの参加を得て、今後のODAのあり方について活発な議論を行っているところです。

本日のシンポジウムのテーマは「ひとの役に立つということ～国際協力の原点を探る」となっておりますが、本日の議論が今後のODA改革の方向性の一つである、国民に開かれ、かつ国民自身のものと感じられるODAの実現のための一助になることを祈念しております。



経済企画庁長官  
尾身 幸次

国際協力事業団、海外経済協力基金の主催により、「国際協力の日」記念国際シンポジウムが開催されますことを心からお慶び申し上げます。

昨今の内外環境の変化をみますと、まず世界情勢については、冷戦終結後の旧社会主義国における市場経済化の進展や途上国の急速な経済成長により、世界経済のフロンティアが大幅に拡大し、一層の経済のグローバル化が進展しているところです。しかしながら開発途上の国、地域の多くはいまだ食糧、貧困等の問題を抱えているほか、地球環境問題等の新たな課題が発生しつつあるのも事実であります。一方、我が国においては、21世紀を目前にして、新しい経済社会システムを創造するための6つの改革が推進されており、国際協力についても厳しい財政事情の下、大きな変革が求められております。

こうした中、国際協力は、途上国を世界経済における新たなパートナーとすることで我々にも利益をもたらすとともに、地球規模の問題の解決に大きな役割を果たしていくものとの認識の下、途上国が主体的に取り組む経済開発を我が国が積極的に支援していくことは従来にも増して重要であります。政府開発援助（ODA）については、より一層の効果的、効率的実施に努めるとともに、国民参加型援助の推進のためNGOとの連携を図り、国際協力に対する国民の支持を得ていく必要があると考えており、経済企画庁といたしましても、関係機関との協力により、施策の具体化に努めて参る所存であります。

このように内外の変化が著しい時期に、国際協力をを行う意義を改めて問い直すことは大変時宜を得たことであり、シンポジウムの開催に御尽力された関係者の皆様に心から感謝を申し上げますとともに、シンポジウムの成功と皆様の御健勝を祈念いたしまして、私のメッセージとさせていただきます。

## パネリスト紹介

### ●コーディネーター



黒田 あゆみ  
NHK アナウンサー

神奈川県出身。東京大学教養学部卒業後、NHK入社。主な担当番組は「NC9」リポーター、「おはようジャーナル」リポーター、「おはよう日本」キャスターなど。現在は「生活ほっとモーニング」のキャスターを務める。著書として『ママでなきゃ、ダメ』（マガジンハウス）などがある。

### ●パネリスト／ファーストスピーカー



プラティープ・ウンソンタム・泰  
ドゥアン・プラティープ財団事務局長（タイ）

バンコクのクロントイ・スラムに生まれ、16歳でスラムに「1日1パーツ学校」を設立するなど、スラムの生活改善に取り組む活動を続け、教育・福祉団体のドゥアン・プラティープ財団などを設立した。1978年にはアジアのノーベル賞といわれるマグサイサイ賞受賞。「スラムの天使」と呼ばれる2児の母。

### ●パネリスト



奥田 真由美  
老人保健施設すこやか苑職員（元青年海外協力隊員）

広島県出身。神戸大学医療技術短期大学部作業療法科卒業後、病院勤務ののち、1993年より青年海外協力隊員（作業療法士）としてタンザニアに派遣され、厚生省国立ムヒンビリ病院で活動。3年半、現地の目線にたって活動したのち、1997年より岡山県にある老人保健施設にて作業療法士として勤務。



堀田 力  
さわやか福祉財団理事長・弁護士

京都大学法学部卒業後、1961年検事となる。1976年以来、東京地検特捜部においてロッキード事件等を担当した。1989年最高検察庁検事を経て、1990年法務大臣官房長に就任。1991年退職し、さわやか福祉推進センター（後にさわやか福祉財団）を設立、理事長を務める。著書として『再びの生きがい』（講談社）、『心の復活』（NHK出版）などがある。



カムチャイ・ライスミット  
チュラロンコン大学経済学部助教授（タイ）

1975年から京都大学経済学部（1984年同博士課程修了）、東京大学経済学部等、通算14年の日本留学経験を持ち、1996年より現職。日本および日本人を熟知する気鋭の経済学者として、タイおよび日本で活躍している。「カラオケも日本文化を知る上で重要」と日頃から幅広い日タイ交流に心掛けている。



草野 厚  
慶應義塾大学総合政策学部教授

慶應義塾大学法学部卒業後、1982年東京大学社会学研究科にて博士号を取得。東京工業大学助教授、プリンストン大学国際問題研究所客員研究員等を経て、1992年より現職。テレビ朝日系「サンデープロジェクト」のコメンテーターとしておなじみ。最新の著書に『ODAの正しい見方』（ちくま新書）がある。

（発言順）

## パネル・ディスカッション

### 国際協力とは 途上国の生活向上をめざして 資本や技術を援助する

○黒田：みなさま、こんにちは。本日、司会をさせていただきますNHKの異田でございます。私はJICAのお仕事やOECFのお仕事については、ニュース、書かれたもの、あるいは学生時代の勉強、その他で知っていただけで、その活動の現場を見せていただく機会はほとんどございませんでした。しかし、ことしの3月にJICAのご好意でジョルダンとトルコでの活躍現場を見せていただき、そこで働いている青年海外協力隊の方々や専門家の方々が、まさに現地の人と一緒に働くことで国際協力が十全になされているのだということを目の当たりにして帰国することができました。

国際協力については、ODAという言葉でニュースの中でも度々耳にしておられると思いますけれども、まずはじめに、本当に借越ながら、私のほうからこの国際協力ということを説明させていただきます。

その前に、ニュースなどでご存じと思いますが、インドネシアのスマトラでの航空機事故で、JICAから派遣されているお2人の専門家の方が志半ばで亡くなりました。この場をお借りいたしまして、ご冥福をお祈りしたいと思います。

そのニュースに関連いたしまして、先ごろ国際緊急援助隊も派遣されております。これは火災の消火や環境保護等に当たるためだと思いますけれども、こういった働きもODAの一環であるということをごみなさま方の心に留めていただきたいと思います。

それでは、国際協力についての説明を始めたいと思います。途上国が開発を進めていく上で不足する資金や技術を補うこと、そしてそこに住む人々の生活の向上に役立つ活動をすることが、国際協力ということです。

国際協力を実施主体別に見ますと、政府によって行われるもの、NGOなどの市民や団体によるもの、さらに、民間企業活動の一環として行われる途上国への投資なども国際協力としての効果をもつものがあるなど、実に多岐にわたっております。

#### ODAの活動

なかでも、次の3つの条件を満たすものを政府開発援助（ODA）と言います。まず、政府または政府の

実施機関によって供与されること。2点目は、途上国の経済開発や福祉の向上に役立つことを目的としていること。3点目は、資金協力の際、供与条件が途上国にとって重い負担にならないこと。つまり、低利である、あるいは無償という場合もございます。

ODAについては、本日、非常に批判的なお気持ちで、闘争心を駆り立てながらこの会場においでになられている方もいらっしゃるかと思うんですけども(笑い)、実はそういう部分もあるかもしれません。しかしODAの活動は、非常に多岐にわたっていること、そして、あくまで人が最前線で活動しているということを、是非しっかりご理解いただきたいと思います。

次に、援助の中身ですが、二国間援助というのをご説明いたします。ここで特に注目していただきたい部分は、無償資金協力ということです。返済義務を課さないで資金を供与するということですね。NGOへの補助金も無償資金協りに含まれています。これらの予算は外務省が管理しております。

それから、無償ではなく、非常に低利・長期で開発に必要な資金を貸し付けるのが、円借款です。これはOECFが担当しています。

次に、技術協力というのがあります。この技術協力事業の主体はJICAです。開発途上国の国づくりの基礎となる人づくりのために、技術やノウハウを伝えるという協力の仕方です。ご存じのように、青年海外協力隊や専門家の派遣、研修員の受け入れなどを通じて、この技術協力が行われます。

こういった二国間援助の他に、政府が世界銀行などの国際機関に資金を提供することを多国間援助と呼んでいます。この多国間援助の場合には、被援助国に援助する際、どこの国からの資金なのかが明示されないため、援助国の顔が見えなくなってしまうというような懸念もあるように聞いています。

ODA全体に占める各援助の割合を数字で申し上げますと、1995年現在で、技術協力が2割強、無償資金協力が約2割、円借款が3割以上、国際機関への多国間援助が約3割、となっております。

#### NGOの活動

この他には、途上国の資金不足を補う開発資金として、また経済協力の一環として、その他の政府資金

あるいは民間資金があります。最近、NGOというのをよく耳にされると思いますが、NGOは利益を求めず途上国の開発問題に取り組む市民団体による活動で、民間非営利団体というふうに訳されています。援助資金・物資集め、国際交流、人材育成など、国内での活動を主に行うもののほか、規模の大きな団体では、海外に事務所をもって、スタッフやボランティアを派遣しているところもあります。私は、政府以外の援助主体として、NGOというのは見逃せない部分だと思っております。

これから登壇していただきますプラティープ・ウンソンタム・秦さんが代表を務めていらっしゃるドゥアン・プラティープ財団は、タイのスラムの生活改善に取り組んでいるNGOの代表的な団体と言えます。日本のNGOからの支援も受けて活動されているということでございます。NGOの場合には、援助の規模が小さくなりますけれども、きめ細かな援助ができると、私はとらえております。この他、地方自治体なども国際協力に積極的に参加されています。

## フェイス トゥー フェイスの活動が国際協力を進める原動力

私は、人が関わってのマン・ツー・マンの支援こそが、相手国からも感謝されるのだと思っております。これはなかなかPRされていませんが、約2年半前の阪神大震災の折、被援助国から逆に援助をいただきました。これも、日ごろの顔と顔を合わせた付き合いがあったからこそだと感じております。

そのような意味では、国民参加型の援助が必要なんだという合意を国民1人ひとりの中に築いていくことが、これからの国際協力をさらに進めていく大切な第1歩になると言えるのではないのでしょうか。そして本日のこのシンポジウムは、そのことを確認するために催されていると、私は思っております。

国際協力に関する日本の現状、国民性、あるいはそれらに対する批判なども受け止めつつ、人の役に立つということ、助け・助けられるということ、共に生きるということ、異なるものを認め合うことについて、これからしばらくの時間を使いまして、パネリストの方々に議論していただきたいと思っております。

## タイのスラムで活動するドゥアン・プラティープ財団

それでは、ファーストスピーカーとして、タイからおいでいただきました、ドゥアン・プラティープ財団事務局長でいらっしゃいますプラティープ・ウンソンタム・秦さんをお迎えいたしましょう。

プラティープさんのプロフィールを簡単にご紹介させていただきます。プラティープさんは、スラムの生活改善に取り組んでいらっしゃいます。バンコクのクロントイ・スラムに生まれ、16歳でスラムに「1日1パーツ学校」を建設されました。1パーツは現在の日本円に直しますと、約0.3円にあたります。1978年には、アジアのノーベル賞といわれますマグサイサイ賞を受賞されました。お子さんが2人いらっしゃいまして、ご主人様は日本人の秦辰也さん。それでは、スピーチをお願いいたします。

## 放っておかれるスラムの子供たち

○プラティープ：まず、今日お招き下さったJICAとOECFにお礼を申し上げたいと思います。スラム出身の私が、このような格式高い組織にスピーカーとして招かれたことを光栄に感じると同時に、この榮譽に報いることができればと考えています。

私たちタイ国民は深刻な経済危機に瀕しており、海外からの援助に大きく依存しています。日本政府および日本の銀行からの支援は私たちにとってきわめて重要であり、アジア各国によって支援された国際通貨基金（IMF）の救援策はアジアの結束を示すよい一例と言えます。ドゥアン・プラティープ財団もまた長きに渡って日本からの支援の恩恵を受けてきました。

たとえば数週間前のことですが、タイ南部のチュンボンで行なわれた麻薬撲滅ミニマラソンに、日本のグループも協力してくれました。おりしもサイクロンに襲われてしまいましたが、このイベントに対する彼らの支援は、すばらしいものでした。

私は人口約10万人のクロントイという、バンコクでも最大のスラム街に生まれ、育ち、現在も住んでいます。現在タイには(バンコクを中心に)およそ2,000のスラムがあり、合計約200万人が生活しています。人々は、新しく見つけた職場の工場の近くで、電気も水道もない場所へ移動し、不法居住します。スラムの生活は子供にとっては苛酷です。両親とも1日中働きに出て不在であることが多いため、きちんとした世話や愛情を受けることなく、道徳観念を学ぶこともないまま育ちます。



## 「1日1パーツ学校」開設、 そして 「ドゥアン・プラティープ財団」設立

私はまだ幸運な方でした。母が4年間学校へやってくれたからです。しかし12歳の時に、花火工場と港で働き始めました。ほかの子供たちが学校へ行くのを見ると、悲しく、うらやましい気持ちになり、なぜ社会はこんなに不公平なのかと悩みました。母は私に、良いことをすれば良いことのお返しがあり、他人に与えれば与えるほど自分も多くを受け取ることができる、と教えてくれました。しかしどんなに努めても、貧しさを逃れることはできませんでした。不安や心配をまぎらすため、13歳で仏教の本を読み始めました。仏教は私を励まし、生きる力と、他人と分かち合う大切さを教えてくれました。当時私は夜間学校に通っていましたが、教師になろうと決心しました。そして16歳の時に、「1日1パーツ学校」を始めました。教育を受けるチャンスのない、恵まれない子供たちと、私の知識を分け合いたかったのです。物質的には貧しい私たちでしたが、知識を分け合い、心を豊かにすることはできました。最初この学校は、政府に違法と見なされ、何年もの間もめましました。しかし最終的には政府にも認められ、私は校長に任命されました。

まもなく私は、都市部の貧しい住民のスポークスマンとして知られるようになりました。1978年には、マグサイサイ賞を受賞し、2万ドルの賞金を手にしました。これは当時のお金で500万円くらいでしたが、私は、この賞金を全部自分のために使い、素敵な家を買おうかと迷いました。しかし自分が仏教徒であることを思いだし、利己的であってはならないと考え、結局ドゥアン・プラティープ財団を設立することにしたのです。ドゥアン・プラティープというのは、ろうそくの炎という意味です。財団では現在、都市部と農村部の貧しい住民のために、教育、衛生、社会サービス、能力開発、緊急援助の5つの分野で22のプロジェクトを実施しています。

### 教育の普及こそが生活水準向上のカギ

教育は常に、財団の活動の根幹となっています。教育こそ、貧しい地域社会の生活水準を向上させるカギです。さまざまな教育段階の2,500人の子供たちが、経済的援助を受け教育を受けています。その多くは、日本のスポンサーの支援を受けていますが、これは単に教育費用だけにとどまりません。一部の子供たちは、

日本に渡ってさらに勉強させてもらっています。財団は、バンコクのスラムに15の幼稚園と、難聴の子供たちのための特殊学校を1つ持っています。さらに、エイズ・プログラム、若い女性のグループ (Young Women's Group)、スラム児童芸術クラブ (Slum Children's Art Club)、信用組合や高齢者クラブのための教育を行なっています。

タイ南部のチュンボンには、ニューライフ・プロジェクトという特別学校がありますが、これは、スラムで麻薬や軽犯罪などに手を染めた若者たちのための学校です。彼らは、通常の教育とともに、農業に重点を置いた職業訓練を受けます。このプロジェクトは多くの問題児の更正に成果をあげており、彼らの大半は、学校を出た後まっとうな道を歩んでいます。さらに、中毒や性的虐待を受けた少女を対象にした、特別ニューライフ・プロジェクトを、バンコク東部のカンチャナブリで開設しようとしています。ニューライフ・プロジェクトは日本の支援により大きな恩恵を受けました。日本から人が来て、枠組みづくりを支援し、子供たちとスポーツをしたり、文化活動に参加してくれています。これこそ、本当の援助です。単にお金を供与するだけではなく、インスピレーションと労力を提供してくれているのです。

### スラム住民自身による コミュニティ開発が健全な社会をつくる

スラムでは、火災が頻繁に発生しますが、このような災害の時には外部からの支援に頼れないので、私たちは消防士を訓練し、それぞれのコミュニティが各自消防団を持てるようにしています。日本の企業グループが消防車を寄付してくれましたが、新たに2台寄付される予定です。スラムが抱えるもう1つの深刻な問題は、居住権と立ち退きです。ドゥアン・プラティープ財団は、コミュニティグループ、他のNGO、地方自治体、地元警察とともに、クロントイ・スラムのマスタープランの準備作業を実施しており、スラムの適切な開発を保障するこのプランを認めるよう、政府に要求しています。

火災と立ち退きは共通の要素を持っています。どちらもコミュニティ社会の構造を破壊し、人々から家と、時には仕事をも奪います。人々は飢え、必要に迫られて麻薬や犯罪に走るのです。最近では麻薬、特にアンフェタミンの消費量増加が深刻で、しかも若い人の間で広がっています。不況が深刻化するにつれ、状況は悪化の一途をたどるでしょう。去年は、私が、警察の麻

薬取引への関与を批判する発言をしたことで、私自身とドゥアン・ブラティープ財団が論争に巻き込まれました。命をねらわれるという恐怖にさらされ、非常にストレスの多い日々を過ごしましたが、私の気持ちを少しでも軽くしてくれたのは、ひとりぼっちではない、という思いでした。私を応援するために集会を開いてくれた多くのスラム住民たちが、この運動を続ける勇氣と決意を私に与えてくれました。

持続可能な開発は、上部から手渡されるのではなく、人々が自分で作り出さなくてはならないものです。ドゥアン・ブラティープ財団は、コミュニティの開発に参加したいと望む数百人のスラム住民と協力しています。

## 人と人が関わることから眞のパートナーシップが生まれる

私たちの仕事にはお金も必要ですが、援助＝資金と考えるべきではありません。すでに申し上げたとおり、日本からは多くの資金援助をいただいています、それだけにとどまりません。今月の終わりには、クロントイの消防団が、日本に招かれ、訓練を受けます。情報の交換、友好関係、新たに学んだ概念などが、援助を通じた眞のパートナーシップを築くのです。現在ドゥアン・ブラティープ財団には、常駐の日本人ボランティアが3人います。財団には毎年、2,000人の日本人が訪れ、私たちの説明を聞いて寄付をしてくれます。このような日本からの来訪者が、私たちの仕事の説明を聞くだけでなく、日本やその他の国のコミュニティの住民に、援助の手をさしのべるよう奨励してくれれば、と願っています。私たちは、財団の来訪者がもっと増え、その人たちが、世界をより良くするために手を貸してくれることを望んでいます。

財団では、次世代のためにより良い社会を残せるよう努めています。健全で強靱な社会の存続は、外部からの援助にかかっています。クロントイ・スラムやその他あらゆる場所の人々を支援して下さっているすべての方々に、心から感謝いたします。

## 各パネリストからのメッセージ パネリストのプロフィール紹介

○黒田：ブラティープさん、ありがとうございます。それでは、他のパネリストのみなさま方のプロフィールを紹介させていただきます。

ブラティープさんのお隣は、奥田真由美さんです。現

在、老人保健施設すこやか苑の職員でいらっしゃいます。今日は、青年海外協力隊員でいらしたというご経験を語っていただきます。広島のご出身で、神戸大学の医療技術短期大学の作業療法科をご卒業になって病院に勤務されたあと、1993年から約3年半、青年海外協力隊員としてタンザニアの国立ムヒンビリ病院で活動されました。そして本年3月より、岡山県の老人保健施設で作業療法士として勤務されています。

そしてそのお隣が、堀田力さんです。さわやか福祉財団の理事長でいらっしゃいます。また、弁護士でもいらっしゃいます。京都大学の法学部を卒業後、1961年以來、検事としてご活躍なさいました。1976年からは東京地検特捜部でロッキード事件などを担当されて、敏腕検事としてお務めになられました。その後、1989年から最高検察庁検事、1990年には法務大臣官房長に就任されました。そしてここが、本当に衝撃的なところですが、1991年に退職されて、さわやか福祉財団（当時はさわやか福祉推進センター）を設立され、現在は理事長を務めていらっしゃいます。ご著書もNHK出版の「心の復活」をはじめ、数多くあります。

そのお隣がタイからおいでいただきましたカムチャイ・ライスミットさんです。タイでは姓名の姓のほうに非常に発音が難しいため、ファースト・ネームでお呼びしても失礼にあたらないということで、今日はカムチャイさんと呼ばせていただきます。カムチャイさんは、1975年から京都大学経済学部で留学され、その後は東京大学経済学部など、通算14年の日本留学経験をおもちで、日本語が非常に堪能でいらっしゃいます。1996年より、チュラロンコン大学経済学部助教授をお務めでございます。日本および日本人を熟知する気鋭の経済学者として、タイおよび日本で活躍です。なお、福沢諭吉の「学問のすゝめ」、中江兆民の「三酔人経綸問答」、私、タイトルを読むだけで精一杯でございますけれども（笑）、これらを日本語からタイ語に翻訳されています。きょうは、流暢な日本語でお話いただけるということでございます。

そして最後になりましたが、草野厚さんです。現在、慶應義塾大学総合政策学部の教授でいらっしゃいます。慶應義塾大学の法学部をご卒業後、東京大学の社会学研究科で博士号を取得されました。その後、東京工業大学助教授、プリンストン大学の国際問題研究所客員研究員などを経て、1992年より現職でお務めになっていらっしゃいます。なお、テレビ朝日系の日曜朝10時からの「サンデープロジェクト」で、辛口コメントーターとしてご活躍でいらっしゃいます。最新刊と

しては、『ODAの正しい見方』をちくま新書から出されることになっています。ODAの現場ウォッチャーとして、鋭く、示唆に富んだご発言をいただけたと思っております。

それでは、以上のみなさま方から一言ずつスピーチをいただきまして、少々の休憩の後、パネル・ディスカッションという予定で進めてまいりたいと思います。

では、おまたせいたしました。奥田さん、スピーチをお願いいたします。

## 人の役に立つことが生きる励みになった

○奥田：みなさん、こんにちは。私は青年海外協力隊の作業療法士隊員として3年4か月、東アフリカのタンザニアに赴任しておりました。タンザニアは、美しい風景や野生動物が数多く住む国立公園で有名な国です。

今日のこの会場には、作業療法士と聞いて、ああ、あの仕事ね、と明確なイメージを思い浮かべることができる人はあまりいらっしゃらないことと思います。作業療法士は、体や心に障害をもった方に様々な作業活動を用いて関わり、社会復帰のお手伝いをいたします。

作業療法士によく似た仕事に、理学療法士があります。理学療法士は体の基本的な機能訓練を行い、作業療法士は応用部分の訓練を受け持っています。たとえば事故で手が麻痺した患者さんに、力が回復するよう筋力トレーニング等を行うのが理学療法士で、ご飯を食べる、字を書くなどの具体的な生活の訓練するのが作業療法士です。

私が青年海外協力隊員を志望した動機は、ただ海外で暮らしてみたいという単純なもので、人の役に立ちたいなどという崇高な気持ちはありませんでした。青年海外協力隊に参加する前は、老人専門病院で脳卒中の後遺症に苦しむ方や痴呆症の方のリハビリテーションを担当していました。卒業して3年間、高齢者の医療に携わってみて、いわゆる機能回復訓練をしても老化現象で機能が落ちていく高齢者に関わることに息苦しさを感じており、今後もこの現場で働いていくのかと思うといたたまれないような閉塞感に苛まれていました。

こんな気持ちから逃れたかったのでしょうか、自分の知らない世界を見たいと思う気持ちが日増しに強くなっていきました。そこで、海外旅行に出ようかとも考えたのですが、せっかく海外に行くのであれば、ただその土地の表面だけを撫でて通り過ぎていく旅人の立場ではなく、その土地で日常生活を送りながら違った文化の中に身を置いてみたいと思いました。当時

の私には、いま流行りの猿岩石のような旅をする人たちは違い、何の準備もせずに飛び出していく勇気はなかったので、いろいろと訓練してくれる青年海外協力隊はととてもいいしくみに思いました。

さっそく青年海外協力隊の募集要項を取り寄せ、派遣要請をしている国の名前を眺めていると、大洋州の国、フィジーでの仕事が当時の私が関わっていた内容にもっとも近かったのも、それを志望することにしました。アフリカ諸国の名もありましたが、そのころの私にとってアフリカはよくわからない恐ろしそうな場所だったので、アフリカは思案の外だったのです。ですから合格通知をもらったときもてっきりフィジーに行くと思いついていたので、派遣国タンザニア、と書いてあるのを目にしたときは、心底驚きました。突然の意外な展開に、ジャングルをかき分けながら任地をめざす自分の姿を思い浮かべて、しばらくほうぜんとしたことを覚えています。

アフリカについてはまったく認識不足だった私も約3か月間の派遣前訓練で促成栽培され、日常生活で必要最低限のことは足りるスワヒリ語と基礎的なタンザニアの国の事情を頭に詰め込んで海を渡って行きました。

現地での私の仕事は、国中でいちばん大きい大学病院で作業療法を実施することでした。しかしながらタンザニアには理学療法士しかいないので、患者の治療を行うと同時に、現地の理学療法士に作業療法の技術指導を行うことになっていました。はじめ、私は作業療法の担当となった理学療法士に2年間でできるかぎりの技術を教えなくちゃと意気込んで、一生懸命訓練場面で指導したり、勉強会を開いたりもしていました。でも私が思うほど熱心には取り組んではもらえず、どうしてこの人たちはやる気がないんだろう、とひどく腹を立てたりもしていました。

しかし長く住んで彼らの置かれている状況を知ることになって、現場で働く意欲が日本に比べてなぜ低いかかわかるような気がしてきました。途上国にいても、この情報化社会の中では、先進国の生活の様子が情報としてどんどん入ってきますし、便利な暮らしをしたいという気持ちも万国共通です。しかし、便利な暮らしにはお金がかかります。彼らは、能力給ではないので勤務内容が賃金には反映されない上、その賃金さえも大変安いのです。おいしいものを見せつけられながら、それに手の届かないような環境じゃ、自分だってやる気をなくしてしまうな、と妙に納得してしまうと肩の力が抜けてあまり腹も立たなくなり、のんびりとしたペースで仕事をするようになりました。すると、彼ら

との心の距離がぐっと縮まって一緒にいろいろな仕事をするようになりました。

中でも楽しかったのは、患者さんの家を訪問して、家庭での訓練方法を指導する仕事です。あるとき、脳性麻痺で立つことができない子供をもつお母さんに、木製の訓練器具のつくり方を指導したことがあります。熱心なお母さんの努力により、その子供はまずまず上手に立つようになりました。その変化をお母さんと一緒に喜んだときは、タンザニアに来て本当に良かったと思いました。

私自身、臨床で働いた経験は3年くらいで決して高い技術をもっているわけではなく、いつも迷いながら訓練していたのですが、いまここには私しかないという状況では、どんなにささやかな援助でも大変喜んでいただけますし、そうやって自分のことを必要としてくれる存在が私自身の生きる励みになるということを実感いたしました。

一方、苦い思い出もあります。交通や通信事情の悪いタンザニアでは、せっかく関わり始めた人と音信不通になることもしばしばです。また今度ね、と言って別れた人がそれっきり姿を見せず、次に噂に登ったのは訃報ということもありました。また、いつかやればいいや、と先のばししたことができなくなってしまって後悔したこともしばしばです。私はここでの体験で、一期一会という言葉の重みを実感しました。

日本とは異なる環境で3年4か月を過ごして帰国後、私は、再び高齢者関係の仕事に携わっています。いまは、高齢者のリハビリテーションに関わることに以前のような閉塞感を感じません。というのも、高齢の方にはいまある機能を維持し続けるという大事な課題があり、私とその課題に取り組む高齢者の方の手助けをし、その人たちとよい関係をもつことがまた、私自身を支えてくれる大きな力になることを自覚したからです。

これも、異文化の中で働くことで自分とは異なった立場の人たちが抱える問題を理解する目が養われたことと、拙い私の仕事に大きな感謝の気持ちを見せてくださり、人に喜ばれることが与えてくれる温かさを教えてくださったタンザニアの人々のおかげだと思っています。

高齢者の人とのお付き合いも一期一会です。以前感じたような苦い思いをしないよう、毎日を大切に過ごしたいと思います。そしてまたいつか、機会があればタンザニアの地に戻って、前よりもっとまじなお手伝いをしたいと願っております。

Asante sana kwa Wananchi wote wa Tanzania. (タンザニア国民の皆様、どうもありがとうございます)

た。) ご清聴、ありがとうございました。(拍手)

○黒田：ありがとうございました。それでは続きまして堀田力さん、スピーチをお願いします。

## ボランティア活動で温かくて 心優しい社会をつくりたい

○堀田：プラティーブさんの情熱、そして奥田さんのご成長が伝わってくる素晴らしいお話を、本当にいい気持ちでうっとりしながら聞いておりました。私は今、さわやか福祉財団で、ふれあいボランティアということをしています。お互いさまの気持ちで高齢者や障害者の方々を支え合うというボランティア活動を全国に広めたいということでやっております。まず、どうしてそういうことをやるようになったかを話させていただきます。

私は、1972年から75年まで3年半ほど、ワシントンの日本国大使館に出向したのですが、そのときのアメリカで暮らした経験がボランティア活動に関心をもつきっかけとなりました。そのとき、私は30代後半ぐらいでした。

アメリカへの出向そのものは、私自身の勉強になると思って喜んだのですが、まだ小学校入学前の2人の男の子を連れていくことだけが気掛かりでした。というのは、アメリカ民族は狩猟民族だから乱暴であるという、まったくいい加減な知識をもっていたものだから、子供たちがいじめられるのではないかと、とても心配だったのです。有色人種ですし、もちろん英語は話せませんし、いじめられるとちょっとかわいそうだなと気に掛けながら、アメリカに渡りました。

ところが、アメリカで借りた家に着いたその日から、近所の子供たちがたくさん遊びに来たんです。当然ですが、近所の子供たちは英語で、うちの子供たちは日本語で話すんです。それでどうして会話が成立するのか、そこがよくわからないんですが、楽しそうに遊んでおりました。その後は、招かれて友達の家にも遊びに行くようになりました。

一方、近所の大人たちを見ると、ずいぶんボランティア活動をやっておられまして、子供たちに野球やサッカーを教えたりしています。私どもの子供もサッカーチームに入れていただいたんですが、さっそく下の子はフォワードにつけてもらって、日本語で何かわめきながら、ボールを蹴飛ばしておりました。このポジションは三浦カズ(三浦知良)と同じポジションでカッコイイから、みんながやりたがるんですね。

一事が万事そういうことで、大人に対してもぜんぜん差別がない。私たち一家を温かく迎えてくれました。

今でもとても感謝しています。こんなあったかい社会はいいなあ、と心から思いました。

さて、出向期間も終わり、3年半後に日本に帰ってきました。帰ってきたとき、下の子は幼稚園に通い、上の子は小学校の3年までなっておりましたが、彼らはまったく日本語をしゃべれなくなっておりました。もちろん私も夫婦は日本語でしゃべっておりますから、彼らも日本語を聞いて理解はできるんですけども、完全に向こうの社会に溶け込んで暮らしておりましたので、英語しかしゃべれない。

そのような状態の2人でしたが、何の心配もなしに公立の幼稚園と小学校に入れましたら、何と2人ともいじめにあってしまいました。日本語が話せない変わったやつ、あるいは国語のできない劣ったやつ、というのが理由だったのでしょうか。いじめに対応するために、下の子は空手を習いに行つてなんとかしのいでくれたんでありますが（笑い）、上の子のほうに登校拒否になりまして部屋から出てこないんですね。これには、私もほとんど情けない思いをしました。

子供社会というのは完全に大人社会の反映ですから、私はいじめの子が悪いとは思いません。結局、日本の大人社会というのは、どこの大学を出たとか、学歴はどうだとか、勤務先での地位が部長か課長かヒラかとか、お金をどれだけ稼いでいるかとか、そういった非常に形式的なことで上下関係をつくっている。そして、上の者は下の者にいばった口をきく。そうすると下の者はおもしろくないから、自分よりもさらに下の者を見つけていばった口をきいてフラストレーションを解消する。そういう日本社会になっている。それが完全に子どもの社会に反映しているんだらうと思いました。

日本経済はすごく発展しました。それはすごくいいことですが、いつのまにか、心のほうが貧しくなっていたんですね。高齢社会がどんどん進むというのに、このままじゃ、決して幸せな日本社会にならないだろう。少しでも温かくて心豊かな日本社会になるようにするには、ボランティア活動を広めるのがいちばん手っとり早い方法じゃないだろうか。いずれ検事をやめるときがきたら少しでもお役に立ちたい、と私はごく自然に考えるようになっていました。

もっともそのことはずっと長らく隠しておりました。アメリカから帰つてすぐロッキード事件が勃発したものですから、そちらに没頭しておりました。その後、横目でずっと日本社会を見ながら、検事をやっておりましたが、だんだん役職も上がり、自分で直接事件の摘発ができなくなってしまつて寂しくなってきたものですから、えい、やっ、と思ひ切つてこれまでの

職を辞して、ボランティア活動の世界に飛び込ませていただきました。それが6年前です。

私がアメリカから帰ってきました20年ほど前は、ボランティア活動をしている人は本当に少なく、検事がボランティア活動をするなんて変だ、何か悪いことをしているんじゃないかと、きつと思われたに違いないと思います（笑い）。当初は本当に細々とした運動でしたが、ここ数年前ぐらいから、ずいぶん日本社会も本当に温かい心豊かな社会になってボランティア活動もずいぶん広まってきたと思います。

戦後の日本社会を振り返ると、とにかくモノがなく、あれが欲しい、これが欲しいと必死になってみんなが働いて、少しでもモノを揃えること、少しでもモノの豊かさを得ることが幸せの道だと日本人全体が信じ込んでいたのが、昭和20年代、30年代、40年代です。そしてだんだん、モノがある人が勝ち、たくさん稼げる人が勝ち、地位の上の人が勝ち、と日本社会がなつていきました。

ところが、大体のモノが揃つた昭和50年代あたりから、日本社会は、人が困っているのは見てられないという人間本来の気持ちが少しずつ出てくるようになりました。それが爆発的に示されたのが、例の阪神淡路大震災だと思います。あれが20年前だったら、現地に助けに行つたのは、全部企業のトラックだったでしょう。自分のところの社員と取引先だけを助けて、あとはモノが余っていても積んで東京まで帰ってくるという助け方だったと思います。それが今度の阪神淡路大震災では、本当にたくさんの一般の方が支援に行かれました。

私は、もともと人は助け合う遺伝子を持っているんだらうと思います。そうでなければ、動物としてはそんなに強くない人類がこのような繁栄するはずがないんです。その遺伝子が、金さえ持っていれば幸せという競争の激しい時期をやつと抜け出して、また助け合えるという段階にきたのかなあと思っております。ふれあいボランティア運動を展開しておりましたが、そういうことを、本当にしみじみと感ずります。

現在の私どもの活動は国内だけですが、在日の外国人の方々にもいろいろな援助活動をやっておりますし、海外とも連携しています。その活動の源にあるのは、人が好きだ、ということなんじゃないかと思っております。そういう活動がこれからもどんどんどんどん広まるといいなと思っております。

○黒田：ありがとうございます。それではカムチャイさん、スピーチをお願いいたします。

## タイの社会基盤整備に 多大に貢献したODA

○カムチャイ：私のファースト・スピーチに与えられた時間は6分間です。私は大学で教鞭をとっているものですが、ふだんでしたら、6分間はイントロだけの時間です。私の次にご発言なさる草野先生の時間がなくなるかもしれませんので、悪しからずご了承願います（笑い）。

現在、日本のODAを受けた国は全世界で135か国あります。私はその中の1か国、タイから参りました。本日は途上国の代表をするつもりで、タイの事例を申し上げたいと思います。

日本の海外開発援助は43年の歴史があります。私はいま42歳です。同列に並べるのは失礼とは思いますが、歴史的に私の人生とだぶっていますね（笑い）。日本のODAはちょうど働き盛りの年齢にもなりますし、これから成果もどんどん出てくると思います。

タイに円借款を供与した歴史は、古いものがあります。1つの事例を申し上げますと、1974年に調印して1979年に完了した、南の大都市ハジャイに向かう高速道路を建設するハイウェイ・プロジェクトがあります。その円借款の条件が非常にすぐれたもので、償還期間が25年、据え置き期間が7年、金利が2.75%というものでした。

このプロジェクトが始まる前は、汽車を頼って農産物を都市に届けるものですから、日数がかかってしまい、届いたときにはせっかくの農産物が新鮮さを失い売価が下がっていました。ところがこのハイウェイが完成したことで農産物を運送する大きなチャンネルができ、仕事を探しに大都会バンコクに出ていった農村の人もだんだん里のほうへ帰りまして、農業をして家族が揃って暮らせるようになりました。また、ビジネスチャンスも増えて所得が増し、雇用機会も多くなりました。

その他にも、たとえば農業金融制度があります。タイには農業組合銀行という組織がありまして、主に農民に無担保・低金利でお金を貸しています。ですから、農家にとってはこの農業組合銀行が唯一の頼りになっているわけです。農業組合銀行では日本のOECDからの円借款で、いわゆるツリー・ステップ・ローンを行っています。以前ですと、タイの農家では一期作で米をつくっていたんですけれども、現在では簡単な条件で借入ができることで、たとえばため池にポンプを買って、乾期にも米をつくれるようになりました。これも、大変喜ばれた援助事例だと思います。その他にも、タイの全農村の23%に相当する地域を電化した事例もあ

ります。電化することによって住民の生活も飛躍的に向上しました。

大都市でも、インフラ整備を円借款に頼った事例がたくさんあります。たとえば首都圏高速道路、地下鉄建設などは、すべて円借款でできたことです。

一方、日本も、被援助国だった歴史があります。たとえば東名高速道路や東海道新幹線は世界銀行からの援助を受けて建設されています。実は、タイの援助を受けたこともあるんですよ。第2次世界大戦中の話ですが、日本は、ビルマ（ミャンマー）に駐留しているイギリス軍を攻撃しに行くとき、通過国のタイと同盟を結びました。そのとき、軍のための食料など、主に米なんですけれども、タイの政府からいわゆるパーツ借款をしたのです。その額はタイの財政を窮地に追い込ませるような大きな額でしたが、タイ政府は貸しました。そのパーツ借款の処理は1960年代後半にほぼ完了しています。日本もかつては、海外から援助を受けた被援助国であったことは、おそらく一般の人たちにはあまり知られていないことかもしれません。

いくつかの事例で見えてきましたように、人の役に立つということは、まさに国境を飛び越えて助け合いの精神のもとに行なわれていると思います。現在、日本はたくさんの成功例があるにも関わらず、行政構造改革の一環としてODA予算を10%カットすることは、私としては非常に残念に思っています。

○黒田：ありがとうございます。それでは草野さん、最後になりましたが、スピーチをお願いいたします。

## ODAは、日本が世界の国々と 共生していくための大事なパイプ役

○草野：私もできるだけ6分間の時間厳守でいきたいと思っています（笑い）。いまカムチャイさんから、円借款の重要性とお互いに助け合うという精神が大事だという話をいただきました。私もまったく同じことを強調したいと思います。なかでも、パーツ借款のお話は私が知らないことでしたので、これからODAのお話をするときに大変役に立つ材料を教えていただいたと思っています。

私はここで、ODAについて、その内容や、私が感じていることを述べてみたいと思います。この会場にお見えになっている方の中には、どちらかと言うと、日本のODAに批判的な方もいらっしゃると思うんですね。量的には世界一をずっと誇ってきたODAは、途上国の経済発展や貧しい人々の生活向上に役立ってきておりますから、私は、概ね成功していると評価しています。

これはご存じの方も多いかと思いますが、日本の経済協力体制は、プロジェクト内容の効率性は別といたしまして、他の援助国に比べましても、少数精鋭で非常に効率的に行われています。日本の援助の関係者の方々は、途上国の方々と協力しつつがんばってらっしゃると、率直に思います。

それから日本の援助は、円借款、無償資金協力、技術協力という3点セットで出来上がっているんですね。黒田さんの冒頭のご説明と重複しますが、円借款ではどちらかという、道路、港、空港などのように、大きなものをつくります。無償資金協力は規模は小さいですけれども、学校や病院をつくったり、あるいは病院のCT装置などを提供します。

それから、援助の現場での技術の協力。技術協力が非常に重要なのは言うまでもありません。たぶんこれからの日本のODAは、人の協力というところにますますウエイトが置かれるようになるのだと思います。また、教育の重要性をプラティープさんは盛んに強調されました。私もまったく同感です。で、こんな言い方をよくしますね。魚をタダで途上国の人々にあげるのではなくて、魚のとり方を教えてあげることが重要だ、と。まさにこれは技術協力の重要性を指し示す例えだと思います。

本日、私はそれらにもう1つ付け加えたいんですね。と申しますのも、日本のODAの目的というのは、これも黒田さんの説明にありましたけれども、経済発展と福祉の向上の2点セットなんです。経済発展のほうは、技術協力だけして、そのあとは自助努力で勝手にやりなさいといってもなかなか難しいものがあります。先ほどの魚の話で言えば、とってきた魚を加工する施設であるとか、加工したものを輸出する港の整備などを援助することが大事になってきます。あるいは、施設と港をつなぐアクセス道路を整備することも必要なことでしょう。それから、その魚市場の運営をどうするかということも技術協力になるんですね。このような援助は、私も実際にインドネシアで事例を見ましたが、なかなかうまくなされていると思います。

ところで、円借款のプロジェクトは、どちらかという費用は大変大きなものなんですね。全部無償で差上げたほうが、返済が必要ないから途上国には役に立つと思われるかもしれませんが、途上国には非常に厳しい言い方になりますけれども、実はそれは自助努力を損なう結果になります。やはりお金を返さなければならないと思うと、一生懸命にがんばって国づくりに励みましようということにもなるんですね。

円借款、そして無償資金協力、技術協力、この3点

セットが日本のODAの特徴であるし、これからもその3点セットを維持していく必要があるんじゃないかと、私は思っています。

次に、日本がODAを行わなければならない5つの理由というのを簡単にご説明したいと思います。第1番目には、何度もお話が出てますように、人道的な側面から途上国の人々を助けましようということです。地球人口57億人のうち10億人が、あすの暮らしにも困るという状況になっています。エネルギーをたくさん消費している日本としては、やっぱりそういう人々の生活を助けるというのは当然のことです。

第2番目は、先ほどのカムチャイさんのお話にもありましたとおり、日本の新幹線、黒部第四ダム、東名高速道路、阪神高速道路などは、世界銀行からの借款で建設されたものです。返済は1990年に終わってますから、つい最近、終わったんですね。ということは、今度は日本が途上国に援助して差し上げる番である、ということではないでしょうか。

それから3番目が、私の専門分野と若干関係があるんですが、日本は、国際社会の経済政治システムの相互依存の網の目の中に組み込まれているということです。どういうことかといいますと、地球人口の大半を占める途上国が経済的に自立する、経済的に発展をするということがないと、私たち日本人の生活も豊かにならないということなんです。日本は輸出入国です。これが変わるということはおそらくないんだろうと思います。その構造を維持していくためには、やはり途上国のほうも、もちろん堀田先生がおっしゃるように、心の豊かな国であると同時に、経済的な発展をしてもらわないといけない。そのためにも、日本はそれのお手伝いをしなければいけないということですね。

それから第4番目は、3番目と関連がありますけれども、日本は天然資源がないということです。日本が必要としている天然資源の大半は、マンガンにしてもニッケルにしてもボーキサイトにしても、それからもちろん原油にしても、ほとんど日本がODAを行っている開発途上国に埋蔵されています。ということは、日本は、資源を埋蔵している国と外交的に、あるいはODAを通じて友好な関係を結ぶ必要があるということです。このような言い方をすると、ODAは経済的な観点から行うべきではない、という反論があるかもしれませんが、しかし、私は、天然資源を利用させていただくためには、ODAを通じて途上国と密接な関わり合いをもつことも十分意義があることだと思っています。

そして5番目は、世界への貢献という観点から見ると、日本は世界の紛争解決に対して、アメリカのように軍

事的な面で貢献することには国民的な合意が得られないためなかなか難しいということです。その点からも、ODAの重要性をあらためて指摘したいと思います。

最後になりましたが、次の2点を申し上げたいと思います。まず1点は、これまで私は、日本のODAがまずまず成功していることと、その重要性を強調してきましたが、だからといって日本のODAがすべてうまくいったというのは言い過ぎだと思います。なかには、非効率な部分もありましたし、本当に必要なところに必要なタイミングで必要なプロジェクトを展開してきたかという、全部が全部そうではありません。また、途上国側の対応が不適切であったため、日本のODAが必ずしもうまくいかなかったというケースもないわけでもなかった、ということも率直に申し上げておきます。

2点目は、日本の財政事情が逼迫している時期ですから、日本の納税者はODAについてこれからもっともっと関心を向けるようになるだろうということです。そうなると今後は、日本のODAの情報公開をさらに進めることが必要になってくるでしょう。単にODAのPRということではなくて、援助案件の形成のプロセスや実施のプロセスで、国民のニーズとといいますか、タックスペイヤーの意見をできるだけ反映させるようにしなければいけないんじゃないかと思います。

○黒田：ありがとうございます。以上をもちまして、それぞれの方々のファースト・スピーチを終わらせていただきます。

## 人の役に立つことで 得られるもの

○黒田：それではパネル・ディスカッションのほうに入らせていただきます。ここでは、人の役に立つ、あるいは国を越えて協力していくことの意義などについて、様々なお立場からご発言いただこうと思っております。理屈の面では人と人が助け合うのは当然だという気持ちをもっていても、感情的に割り切れない部分があるなど、いろいろな葛藤があるのが、このODAの難しい部分ではないでしょうか。

まず、自分が直接あるいは間接的に人の役に立ちたいということ、それが、ボランティアをするときの基本になっている気持ちだと思います。人のお役に立つことで、ある種の満足感を感じますね。ただ、それが自己満足であってはまずいとは思いますが、人のお役に立ちたいという気持ちが、たとえばODAの現場においてはどのような形で自らに返ってくるんだろうか、という視点から話を進めていきましょう。現場体

験者の奥田さん、いかがでしょうか。

## 自分を信じて踏ん張れるエネルギー

○奥田：この点につきましては先ほどのスピーチでも言わせていただいたんですけども、これまでは自分なんてどうでもいい存在なのかなと思っていたのが、いや、そうじゃない、自分がここでごんばらなければ他にだれがやるんだ！ というふうに踏ん張らせてくれる大きなエネルギーを得たという意味で、現地で私がお役に立てたかどうかは別として、タンザニアで過ごした3年4か月は、私にとっては本当に貴重な経験でした。

青年海外協力隊に参加する前は、同じ福祉の現場にいても、自分が何のためにこの仕事をしているかの自覚というものがほとんどありませんで、いわば、むやみやたらに手足を振り回しているようなものでした。今は、自分の仕事に意義を見出しています。

○黒田：人のお役に立つこと、という視点から、ボランティアということをとどのようにとらえたらいいのでしょうか。堀田さん、いかがでしょうか。

## 自己肯定感

○堀田：やっぱり人間は、自分が生きていることの意味を肯定したいんですね。たとえば、非行少年というのがいますが、彼らにとっては非行すること自体が自分の生きている意味を肯定する自己表現の1つだと思えますよ。非行少年ですから、お勉強がダメとか、あるいはお行儀がダメとかで、学校でも家庭でもダメダメダメとやられている。親はもちろん励まそうと思ってダメと言っているんだけど、ダメダメダメと言われると、子どもはそのとおりに受け取っちゃって、自分の生きている意味がわからなくなっちゃうとか、肯定できなくなるんですね。

そこで、弱い子は自殺してしまうんですけども、やっぱり死ぬのはいやですからね。そうすると、いいほうで褒めてもらえないなら悪いほうで自分が生きていることを示してやろうとする。それが非行なんですね。

だから、家からお金を5万円とってこいなんて、相手がしたがらないことをさせようとする。お金も欲しいんだけど、実のところは、自分の命令で人が動く、自分はそれだけの力をもっている人間だということ肯定したいんですね。だからオートバイだつて、パタパタと夜中にやかましくする。あれは、どうだ、お前ら、俺のおかげで寝られないだろう、おれの力はそんなすこいんだぞ、ということを示したいんですね(笑)。



## 支援する側の心構え

ですから、少年院で教官が、人に迷惑をかけて何をしておるか！と叱っても、ぜんぜん効き目がないんです。彼らは、人に迷惑をかけることによって自己肯定しているわけですから。そういうふうにして、マイナスの方でも自分に力があるということを肯定しないと、やっぱり人間で生きていけないのかもしれないですね。

実は、非行少年を更生するためのプログラムに、特別養護老人ホームに連れていくプログラムがあるんです。これはボランティアをするためではなくて、無理やり連れていくんです。そしておじいちゃん、おばあちゃんたちの食事の介助をさせます。

女の子は真っ赤に塗った長い爪をしていますし、男の子は髪に、いわゆるソリを入れています。ソリを入れたり、髪の毛を金髪や銀髪に染めているのはめずらしいですから、おじいちゃんやおばあちゃんは喜んでくれるんです（笑い）。だけど長い爪は介助のときに危ないですから、やっぱりこれは切らなさいと言うんです。で、はじめは切らないです。というのは、爪を長くしているのも、自己存在の肯定なんです。私、こんなに長い爪している、怖いだろう、どうだ、と。一種の力の誇示なんです。

そうやって彼らを無理にでも連れて行って食事の介助をさせると、彼らに、おじいちゃん、おばあちゃんが、ありがとう、と言ってくれるんですね。実は、これは事前に施設長さんに頼んである、ありがとうボランティアなんです（笑い）。彼らは、ありがとうと言われると、うれしいんですね。それまで人から、ありがとう、と言われたことがない。ダメだ、ダメだというマイナス、マイナスできているのが、プラスの評価を受けてはじめて感謝された。そうすると非行少年がそこでもう本当にいきいきとしちゃって、自分でも人を喜ばせる力があるんだということで、ますます食事の世話を一生懸命するわけですよ。そうすると、横ですんでいた女の子も爪を切って、私も行く、ということになります。

やっぱり人間というのは、自分が人の役に立っている、自分はそういうプラスの存在である、自分は肯定されている、と実感できることが生きる上での基盤になっていると思うんです。ですからボランティアも、人の役に立つことで自分がそれだけ意味のある人間であると肯定したいという気持ちでしているんだと思います。

○黒田：プラティープさんはボランティアを受ける側、あるいはいまご自身がお仕事でボランティアを推進していらっしゃると思いますので、どちらのお立場もよくご存じだと思います。たとえば日本からODAで協力するときに、先ほどからお話が出ておりますように、私たちは支援することによって自ら得るものもあるのですが、支援を受けるお立場の尊厳をどういうふうに考えていったらいいのか、非常に悩みます。プラティープさんは、支援を受ける側の尊厳ということについていかがお考えになりますか？

### 相手の社会に適応し、文化を尊重する

○プラティープ：心から助けたいという気持ちがなければ、意味がないと思います。私の財団は多くのボランティアを受け入れています。順応する人もいれば、抵抗する人もいます。たとえば、タイでは、手でものを食べる人たちがいますが、ボランティアが手で食べることを拒めば、地元の人々は、自分たちは原始的だと思われる、と感じてしまうでしょう。ボランティアは、その社会に適応し、その文化を尊重しなければなりません。また、ボランティアの人々にとって、物事を前向きに理解し、楽しみ、とらえようとするのがとても重要なことです。

当財団のように、コミュニティに根差した団体は、コミュニティの自立を可能にし、持続的な開発を実現するには、お互いの協力が不可欠だと信じています。

○黒田：支援をする側の心構えとしては、心が伴わなければならないということ、さらには相手国の文化とその生活習慣に自らが入っていくという形でなければならないということ、お互いの協力関係が必要であるということの3点が大事な点というふうに、今伺いました。

ところで、技術協力ということになりますと、協力という言葉は使っていますが、技術の高い国から低い国へ伝授することになりがちですよ。そうすると上下関係になりますから、相手の尊厳ということを非常に考えてしまうんですけど、そういった点などについて、まず、心情的な部分ではどのように考えたらいいのでしょうか。草野先生、いかがでしょうか。

### 相手の立場に立って要望をよく聞く

○草野：私は援助の現場を必ずしも経験しているわけではないので、ややアウト・オブ・フォーカスな意見になるかもしれませんが、私が申し上げたいのは、技術協力を含めてODAというのはなかなか難しいということです。日本が協

力したいことと、それから途上国側が協力してほしいことが、必ずしも常に一致するとは限らないですね。

技術協力に関して言えば、昔は、どちらかという和最先端の技術を日本が売り込むというようなケースが非常に多かったんですけども、最近では、途上国側の本当のニーズに応えるために、途上国の今の経済や社会習慣に合ったような機材を提供したい、あるいは技術を提供したいと考えているわけです。そうすると、途上国の現段階の技術のレベルが比較的、日本のスタンダードあるいは欧米のスタンダードよりもやや遅れている場合が多いんですね。ところが途上国のほうは概して、先進国からせっかく技術や機材を供与してもらったんだったら最先端の技術を欲しい、機材を欲しいというようにリクエストされる場合もあると聞いています。それがODAを難しくしている1つのポイントではないか、という感じがしています。

○黒田：JICAの活動の1つに、機材のメンテナンスを研修するというプログラムもごございますね。ですからそういう意味では、非常に微に入り細に入ったといえますか、まさに至れり尽くせりの援助だなあと感心して現場を見てきましたけれども。

○草野：たぶん奥田さんに、そのあたりのフォローをしていただけるんじゃないかなと思います。

○奥田：私がいた病院にも最先端の多額の医療機材が無償で入ってきたんですが、やはり実際の現場で行われている技術は、まださほどそこまで進んでいない場合もありました。それからアフリカでは、もとの宗主国がイギリスだったりしますから、イギリス製のものをよく使っています。そうすると、日本からもってきた機材は使い勝手が違うのでなかなか使ってもらえないというケースもあったんです。

実は、私の職場の整形外科の医師が日本から贈られた機材を使いこなすための研修を受けたいとリクエストしてきたので、JICAの現地事務所に伝えましたところ、個別でフォローアップの研修のプログラムをつくっていただきました。現在、彼は日本で研修を受けています。この会場にも来ています。このように、日本の援助は割ときめの細かいことをすると思っております。

○ブラティープ：貧しいコミュニティや地元の教師たちと仕事をする時には、実際そんなハイテクは必要ないんですが、それを受け入れるよう強要されています。本当に欲しいのは、私たちの要望になかった技術なのです。新しい技術を手に入れるのに、借金しなくてはなりませんし、そんな機械の作り方も知りませんから、私たちはただ使う一方の消費者になってしまいます。

もう1つ例をご紹介します。私が4年半、政府の学

校で校長を務めていた時、4台のコピー機を供与されましたが、これを使うには、かなりの経費がかかりました。米、ゴムなど、多くの天然資源を使わなくてはならなかったのです。その後、おはなしキャラバンと曹洞宗のボランティアたちと仕事をした時、謄写版のことを知りました。謄写版はとても安く、私たちのように貧しい国やコミュニティにふさわしい機器でした。でもそれまではその存在を知らなかったのです。藤田さん（JICA総裁）、どうぞこれからはこんなことも考慮して下さい。ハイテクがタイにとって必ずしも良くないこともあるんです。

○草野：割り込んで申し訳ありませんが、ODAがまさに難しいのは、ブラティープさんみたいな考え方の人がばかりじゃないということなんです。中には、やっぱりハイテクの機材を欲しいという人がいる。確かにそれも必要なんです。だから僕は両方必要なんじゃないかと思うんです。援助する側が、そのへんをどう見極めるかが非常に重要な課題です。

○黒田：カムチャイさんは、そのあたりをいかがお考えですか。

○カムチャイ：まったく同感です。地元の技術レベルに合った機材の方は、タイ人同士でもなんとか工夫をして使いこなせますけれども、最先端技術の機材の要望がある場合はメンテナンスまで含めて、やはり先進国に頼らざるを得ません。その国にどのような技術供与あるいは技術協力が必要かを見極めるのは、非常に難しいことですね。

途上国の人がよく言われることは、申請時には最先端の技術を搭載した機材であっても、供与された時点ではもうすでに時代遅れになっていた、ということがしばしばあったということです。とくにコンピュータは技術革新がすごいスピードで進んでいますから。やはり供与する側と受ける側が地道に協議して、いったい何が必要なのかを決めることがいちばん効果的ではないかと思います。

○堀田：本当におっしゃるとおり、相手の気持ちをいかに酌むか、ということがいちばん大事ですね。そのためには、徹底的に要望を聞くのがいいと思います。阪神淡路大震災のときも、被災者の要望が刻々と変わるんです。最初は、にぎり飯がない、水がないと。もう必死になってにぎり飯、水を持っていきました。で、3日から5日もすると、また握り飯か、と言われる（笑）。今はあったかいうどんが食べたい、と言われる。

○黒田：真冬でしたからね。

○堀田：そう言われたから、今度はうどんを炊き出すと、

ときにはカレーパンぐらい欲しい、と言われるんです（笑い）。同じ人でも要望が変わっていくんです。だから、人に差し上げるって、本当に難しいですよ。おっしゃるとおり、やっぱり何が必要なのかを聞くのが大事ですね。

○黒田：プラティーブさんの場合には、たとえば謄写版はいわゆるご主人様の秦さんが所属していらしゃったNGOなどから、またコピー機はもうちょっと広い形、あるいは大きな援助という形で供与されている。ですから、そういう棲み分けと言いましょうか、きめの細かい援助と、大規模な援助とを組み合わせるやり方は1つの方法かなと、いま話を伺っていて思ったのですが、いかがでしょうか。

○草野：おっしゃるとおり、実際にそういうふうな方向にあると思います。ただやっぱり、すべてのプロジェクトに対してフォローアップができていないわけではありません。私の知るかぎりでは、4,000ぐらい、オン・ゴー・イングの案件が日本のODAにはあるわけです。そうすると、最初の私のスピーチでも申し上げましたように、非常に少数精鋭で対応しているものですから、どこか欠け落ちてしまうところがあるんですね。そのような現状ですから、いまは立ち止まって、日本の援助のあり方はこれでいいのか、と点検する時期にきているのではないだろうか、というのが私の持論なんです。

## 開発と環境問題

### 環境問題は地球規模で取り組むべき問題

○黒田：では次に、環境問題への対応についてはいかがでしょうか。私たち人間はどこに国に住んでいようとこの地球上ではお互い共生している状況ですから、環境問題に取り組むことは地球市民として大切なことであると思えますけれども。

○カムチャイ：環境問題は、1国だけに固有の問題ではなく、国をまたがって起こる現象だと思います。ご存じの通り、最近、インドネシアで起こった火災による煙害では、隣のマレーシアやタイ南部でも大きな被害を受けました。黒田さんもおっしゃいましたが、煙害はガルーダ機墜落の原因にもなりました。ですから環境問題は今後、地球サイズで考えるべき問題になっていくだろうと思います。

地球サイズという意味では、ついこの間、橋本首相が中国に対して、償還期間40年間、据え置き10年間、かつ低金利という非常に優れた条件で、環境問題解決のための資金援助を提供してくれました。途上国として、非常に力強く感じました。

○黒田：環境問題に関しては、これまで先進国は自分たち

の生活を便利にするためにさんざん好き勝手に地球を汚してきて、今度は自分たちに開発を抑えろというのかと、途上国の方からは、そういう意見もあることと思います。そういう中で、開発に対する援助はどうしていったらいいのでしょうか。

### 急がれる先進国の経験と知恵に基づいた環境援助

○プラティーブ：ODAを通じて、すでにみなさんは緊急事態の際に支援してくれていますし、借款や技術者も提供してくれています。しかし、私たちに本当に必要なのは、経験なのです。みなさん自身が先進国になる途上で経てきた経験です。工場で働く人たちは、化学品の危険を知らないために死んでいます。そして、多くの幼い子供や主婦は、いまだに汚染された川の水を料理に使っています。私たちは、このようなケースに対処できるような経験、技術者を求めているのです。5年前、地方のコミュニティで大きな化学爆発があり、様々な種類の薬品が混じり合っていました。すぐ死んでしまった人はまだ幸運でした。生き延びた人は、今とても苛酷な生活を強いられ、苦しんでいます。タイにはまだ、安全基準というものが存在していません。何が危険で、何が危険でないのかを示すリストがないのです。そういったものこそ、本当に私たちが必要としているものです。

○草野：いまプラティーブさんは非常に重要なポイントをご指摘なさいました。きょうはJICAの方もいらしゃいますので、これから私の申し上げることが違っていたら、是非訂正をお願いいたします。

日本の環境援助は、金額的にもシェアの点においても、急速に伸びています。ただ、その中身に問題がないわけではありません。日本の環境援助というと、水道と下水が得意なんですね。そして、この分野の専門家として技術協力をする人は技官の方が多くて、政府系の機関、あるいは官僚出身者で占められています。ところが、プラティーブさんが今おっしゃったような環境汚染の専門家は、地方自治体に多くいたりします。地方自治体からも、環境汚染に関する技術協力が始まっていますけれども、まだまだ十分ではありません。民間企業による専門家の派遣も始まっていますが、まだまだシステムが出来上がっていません。ですから、必要とされる技術協力の専門家が育っていないんですね。そのあたりが、今後の大きな課題だと思います。

ところで最近、日本は、インドネシア、中国、タイの3か所に、アジアの環境汚染を調べるためのセンターをつく

りました。これは無償資金協力と技術協力の組み合わせでつくっております。そのような意味では、日本はアジアの環境問題に大いに貢献していると思います。

○黒田：今の国際社会を見ると、たとえば経済情勢は必ずしもかつての高度成長の状態にはありません。日本国内に目を転じると、これまた非常に低成長経済下にあります。このような国際情勢、あるいは日本の情勢を踏まえた上で、余力があるから、人や国家はボランティアをするのか。それとも余力がない経済情勢の中にあってもボランティアをするべきなのだろうか、という点について、ご意見を伺いたいと思います。

### 環境破壊緩和と格差是正のために、先進国は生活レベルを落とすべき

○堀田：いま黒田さんが提起された問題と、発展と開発の問題は、不可分な問題だと思います。きょうの藤田総裁の挨拶の中に、“この小さな地球”という言葉がありました。どうして途上国の援助をするのか、に対する答は、“この小さな地球”という言葉に収斂されていくのではないかと思います。

つまり、この小さな地球には飽和状態にあるほどにモノを消費しているところと、食べられないために餓死する人が毎日出ているところがあります。いったいこんなことでいいのか、と思う気持ちが、私は援助の原点にあるのだと思います。したがって、日本に余力があるとかないとかという問題ではなく、同じ地球に住むものとしてどの地域の人とも十分に食べられるようにしたい、という気持ちが援助を支えていくのでしよう。

だからなるべく早く先進国と途上国の差をなくすためには、途上国が自力で動き出せるころまでは先進国が援助しなければいけない。そうして、地球上のどこへ行ってもまったく同じような暮らしができるようにもっていきたい。これがやっぱりこの小さな地球に生きている人間のいちばん自然な気持ちであり、そこから考えると余力があるとかないとかの問題じゃないだろうと、私は思うんですね。

しかしそのような観点で援助をしていくと、開発と発展がどうしても衝突することになります。やはり開発そのものをどんどん続けていけば、それ自体が環境破壊、森林破壊、河川の破壊を招きます。開発をある程度のところで止めてしまわないと、地球全体、人類全体が危機にさらされるということがもう見えています。つまり、全部が先進国と同じ開発をして同じ生活レベルになって、それで地球がもつのか、という難しい問題がそこにあります。それはみんなで考えて

いかなければいけないだろうと思います。

ところが、これまで日本は途上国の森林からどんどん木を切り出し、さんざん公害をたれ流してきました。ずいぶんいい思いをしてきているわけですね。ですから、これからは日本と同じようにやろうと思うのに、それを抑えるのか、と途上国に言われると、日本は何も言えないんですね。

しかしそうは言っても、環境破壊や公害を押さえていかなければなりません。それではどうすればいいのかというと、私は日本人自身が経済発展や便利な生活を求めるばかりではなくて、むしろ我慢して生活レベルを落としていくのが1つの方法じゃないかと思うんです。日本がそれを示すことによって、ああ、あういうふうにしなきゃいけないんだと、途上国の方々にもわかっていただく。そういう形での地球規模の平準化ということを考えなきゃいけないのかなという気がします。

### 途上国では環境問題よりも開発優先が現状

○黒田：カムチャイさんは、タイの学生を教えていらっしゃるんですね。若い彼らからは、開発、発展、環境問題についてどんな意見が聞かれますか。

○カムチャイ：環境問題にかぎらず、すべての国際的な問題について、学生の意識はいまだに低いと言わざるを得ない状況があります。彼らは、自分の成績のことしか頭にないようです。(笑い)。

○草野：それは日本でも同じです(笑い)。

○カムチャイ：社会問題に興味をもっているのは、ごく一部の学生です。しかし、学生時代にはそれほど社会問題や環境問題に関心がなくても、いままで自分が安心して生活したり勉強を続けてこられたのは、すぐれた環境やいろいろな方面からの支援があったからなのだという感謝の気持ちがあってはじめて、今度は人の役に立ちたい、国際協力しようという気持ちが湧いてくると思います。

このような人の役に立ちたいという思いは、堀田さんがおっしゃっていたように、自分の生きる意味を肯定したいというところから湧いてくるんだろうと思います。要するに、人の役に立つことは、結局、自分のためにもなるということですね。

いまの段階では、日本は今後、海外援助やODAを削減することが予測されますけれども、外国人の目からすると、それは日本人自身の自信喪失にしか映らないと思います。要するに、もう自分は地球の人々のためには役に立たないだろうと思うから、予算をカットで

きるわけですね。

○草野：それは新たな視点ですね。カムチャイさんに確認をしたんですけども、カムチャイさんが教えておられる学生さんは、開発と環境、どちらを優先して考えているんですか。やはり経済的繁栄を第一に優先しているんですか。

○カムチャイ：やはり今のところは、開発のほうを優先していると思います。

○草野：やはり、途上国からの離脱とかテイクオフというのは絶対に抑えることはできないので、現状では、環境問題よりも開発を優先するというのが前提になるんだと思います。ただ、堀田さんがおっしゃるように、環境問題と開発のバランスをとるのも急を要する問題です。そのためには、日本が率先して生活レベルを落として範を示す方法があるということですね。私はこれはなかなかいいアイデアだなと思ったんですけども、私の学生を見るかぎりでは、なかなかそれは難しい（笑）。これはたぶんうちの学生だけじゃないでしょう。そこで、どうやって範を示すのかというのを、堀田さんにもう少し具体的にお聞きしたいと思います。

## 過剰にモノを持つことは 幸せにつながらない

○堀田：最近では、学校教育の中でも少しずつ環境問題について学ぶようになってきました。たとえばある小学校では環境問題を取り上げてディベートを行なっています。また、これは小学生の子供をもっているお母さんに聞いた話ですけども、そのお母さんがうっかり割り箸を使ったところ、お母さんは環境問題をわかってないの？ 割り箸なんか使って、と叱られたというんですね。子供たちは環境問題の重要性をわかってきているんですよ。ですから、いまの子供たちが大人になったら環境問題に配慮して率先して生活レベルを落としますよ。

○草野：そうかな？ 大人になる途中で変わっちゃうんじゃないですか（笑）。

○黒田：すると、生活レベルを落とすことは百年の計ですか？

○堀田：百年もかからないと思いますよ。というのは、「清貧」なんていう言葉が10年以上も前に大ヒットしたんですよ。あれはなぜ大ヒットしたかという、環境問題に関係なく、モノを持っていること＝幸せ、ということに疑問を持ちはじめているからなんですね。なかなか今の学生さんの年代の人はピンとこないでしょうけれども、もっと上の年齢の人たちはモノを多く持つことが必ずしも幸せにつながらないと感じ始めています。

実際、モノを持って、入居金が3億～5億、かつ毎月30万円～50万円も支払う有料老人ホームに入っている人がいるんですけども、その人は幸せかという、まったく不幸なんですね。すれ違ったって話もしないし、50のソファ付きの大カラオケルームもあるんだけれども、だれも一緒に歌おうとって来ないんです。その人は、人とのふれあいなんてしたくないんですよ。こんな生活は、はたして幸せでしょうか？

すると、人はお金がありさえすれば幸せになれるんだろうかと、みなさんはこのごろけっこう考えはじめています。だから学生さんばかり見ていると絶望するかも知りませんが、説いていけば、私はわかってもらえると思ってるんですけどね。

○黒田：奥田さんは、いまの堀田さんのお話をどう思いますか。

○奥田：最近では、いわゆる先進国ではない、アフリカですとかちょっと不便なところに旅行する若い人も増えていますから、いま堀田さんがおっしゃられたようなことは、どちらかといえば若い人のほうがはやくから肌身で感じているんじゃないかと思います。

私自身もタンザニアに行った初めのころは、モノがなくて困ったなあと思ったこともあったんですが、だんだんそういう環境に慣れてきますと、モノを使わずにすむ自由な感じがとても気に入ってきて、いままでモノに振り回されてきたんだなあという感じをもちました。で、日本に帰ってきたときには、たくさんモノがあって選ばなくちゃいけないとか、それを使わなくちゃいけないような感じがして、とてもしんどかった覚えがあります。ですから、そういうふうな体験をどんどんしていくと、無理して生活レベルを落とすというよりも、自然にそういう気持ちが起こってくるんじゃないかという気がします。（拍手）

○草野：本当に、青年海外協力隊のみなさんみたいな若い人ばかりだといいいんですね（笑）。

○黒田：近頃は、情けは人のためならず、という言葉の本意を誤解していることがありまして（笑）、人のためにならないからやらない、というのが正しいと思っている人もいます。今の話の流れで言えば、現状の生活レベルを落とすことが自分がよりよく生きることにもつながるんだ、ということにも思いを馳せていただきたいと思います。

## 今後の国際協力の展望

○黒田：さて、フロアからの質問をいただかなければならない時間になってしまいました。私の不手際で進行が予定より少々遅れ気味です。申し訳ございません。

それでは、パネリストのみなさん方から、本日、どうしてもこれだけは言っておきたい、あるいは総裁に直訴したい、何でもけっこうでございます、そのメッセージをいただいてからフロアからご質問を受けようと思います。1人1分少々しか時間はありませんけれども、プラティープさんからお願いいたします。

### 国民の税金である援助資金を大切にしたい

○プラティープ：他国のために多くの税金を払ってくれている日本のみなさんに、お礼を申し上げます。本当に感謝しています。被援助国として、とてもありがたく思っていますし、みなさんの税金を最善の方法で使うように努力します。ありがとうございます。

○奥田：私もプラティープさんとよく似た話になるんですけども、青年海外協力隊もみなさまの税金で賄われておりまして、私もみなさまの税金でとてもいい勉強をさせていただきました。今度は自分が納税者となって次の青年海外協力隊員たちを支えていきたいと思っております。どうもお世話になりました(笑い)。

○堀田：本当に一言、これを言いたいと思います。みんなプラティープさんを応援しましょう。(拍手)

### 途上国の価値観理解に努めてほしい

○カムチャイ：1分間ということは、インスタントラーメンも食べられないくらい非常に短い時間ですね(笑い)。私のお伝えしたいことは、「OECDニューズレター」の10月号に人本主義的な援助を提唱した私の拙い論文が載っていますので、それをご覧になっていただきたいと思っております。

私の言いたいことは、ODAの活動は、国と国、あるいは異文化との接触ですから、よくカルチャー・ショックが起こるわけですね。ですから、郷に入れば郷に従え、と。途上国の要請、必要とするもの、価値観をよく理解した上で、お互いに協議してやっていけたらいいなと思っております。

## 現在の援助は 援助国卒業に向けての一里塚

○草野：日本のODAは、国民1人当たりの負担がそれほど大きくないことをわかりやすい例で申し上げます。たとえば公共事業の一環として道路に使われるお金との比較で言うと、借金の返済分も入れてですけれども、毎年1兆円ぐらいを道路のために使っているんですね。一方、ODAに支出されるお金はどのぐらいかという、円借款分も入れて1兆6,000億円ぐらいです。片や1兆円、片や1兆6,000億円です。ODAのためのお金は国民の大きな負担になっているのでしょうか？

それからもう1つは、日本が途上国をお助けするということは、実は日本が援助国を卒業できるチャンスをつくることにもつながっているんです。もうすぐシンガポールは援助国に変わっていくわけですね。いずれタイにしても、それからフィリピンにしてもインドネシアにしてもそうになっていくでしょう。そうすると、そう遠くない将来、日本の納税者も、税金を途上国のために使う必要がない時期がくるとのことなんです。まさに、情けは人のためならず、ですね。

○黒田：事実、カムチャイさん、そしてプラティープさんの故郷タイは、無償資金供与を受ける国から有償資金供与を受ける国に変わってきています。

## 参加者からの質問・コメント

○黒田：それでは15分弱の時間でございますけれども、フロアのみなさま方から、パネリストのみなさまへのご質問等をお受けしたいと思います。

○質問：草野さんに2点、質問します。まず1点は、日本のODAは効率的なところもあるけれども、一方では非効率なところもあるというお話がありました。その非効率な部分には、援助資金が本当に必要な人のところにいく前に、途中でなくなってしまうというようなことも含まれていると思うのです。そこで、本当に必要な人のところにきちんと援助資金が届くための組織をどのようにしてつくっていったらいいのか、そのところをお聞かせください。

それからもう1点は、私の友人で今ネパールで1人で学校を建てたりしている人がいます。で、彼の話によると、組織で援助している場合には、組織の運営のために半分以上の援助資金が使われてしまい、現実には総額の半分ぐらいしか必要なお金に届いていない場合もあるそうです。もちろん組織運営の費用は必要経費だと思いますけれども、そのへんの兼ね合いをどうするかが大切だと思うのです。そのあたりの現状を、もし

ご存じならばお聞かせいただきたいと思います。

○草野：後者のほうについては、十分な答えはできないかと思いますが。前者については、確かに非効率な部分があると思います。たとえば本当に途上国のニーズに合ったような病院を建てたかどうか、あるいは学校を建てたかどうか。こんなに立派な、だれも使わないような機材の入ったなんとか交流センターみたいなをつくるべきだったのか？ というようなことは出てきていると思います。ですから、個々の案件を取り上げると問題がないわけではありません。

もう1つは、ご指摘になったように、途上国の為政者やODAの受入先の政府の職員などにお金が渡ってしまうケースがないわけではないと思います。私はこういうふうに考えるんです。途上国からいらっしゃっている方々には大変失礼だとは思いますが、だから途上国、だと。堀田さんがいらっしゃいますからそういう大きなことも言えませんが（笑い）、汚職に関して言えば、日本はクリーン度からいいますとまだまだ途上国よりはましだというふうに思っています。

日本にはODA大綱というものがござります。この中には、環境と開発の両立であるとか、あるいはあまり軍事費用を使うところにはODAを行わないとかの、いろんなチェック項目が入っております。しかし残念ながら、汚職に関してチェックする項目はありませんので、新たに汚職の項目をODA大綱に入れるとか、新たにガイドラインを設けるというような工夫が必要なのかなと思っています。

後者はどちらかというと、日本は組織のためにお金を使わないから十分なケアができないというような指摘が、逆にあるぐらいです。やはり大がかりなプロジェクトを成功させるためには、バックアップのための費用は非常にがかかります。ただ日本の場合、人件費が高いということも考えなければいけないかなとも思っています。十分な答えにはなっておりません。

○カムチャイ：私からもコメントをさせていただきたいと思います。援助案件が成功しているかどうかの評価は、それぞれの国の基準によって違いがあると思います。たとえば、日本人の目からして、ああ、成功してないな、だらしがないなと思うかもしれないことでも、途上国にとっては、ああ、これで十分だと。満足できるということがあります。また、貧しさ、と一言で言っても、日本の中の貧しさと、途上国の貧しさの中身が非常に違うわけですね。日本の中でも貧しい人々はいっぱいいるのに、なぜ海外に援助するの？ という質問があるかもしれません。そのとき、海外のほうはもっと悲惨な状態にあるんですね。ですから、比較や評価は一言では言えない難しいところがあるということです。

私は、成功かそうでないかの評価の基準は、国によって、または発展段階によって違いがあると思います。あれこれと評価をするよりも、援助することによって共に汗をかき、そして悲しみ、喜びを共に分かち合うことのほうがより大きな意味があるんじゃないでしょうか。ですから評価をあまり云々せず、今後とも引き続き援助を惜しまないでやっていただきたいと思います（笑い）。私自身は、やはり日本人は非常に細やかな心情をもっている民族だと思っています。本気で援助をやりようと思えば、必ず成功すると思います。

ご参考までに組織として使う費用について申し上げますと、日本が海外援助のために組織として使う費用は、世界の国際機関に比べて非常に少ないですね。事例を挙げますと、たとえばOECDと世銀を比べますと、職員数はOECDは330名、世界銀行はなんと6,059名です。期中承諾額は、OECDの場合は116億ドルですが、世銀のほうは225億ドルです。職員1人あたりの期中承諾額に換算すると、OECDはだいたい3,500万ドルを担当しているのに、世銀のほうはたったの400万ドルです。この数字から見ても、日本の国際援助をしている機関はそんなに無駄遣いをしているとは思いません。JICAのほうも、おそらくそんなに無駄遣いはいしていないと思います（笑い）。

○黒田：あとお1人ぐらい、質問を受ける時間があります。

○質問：私は韓国から参加している者でございます。今日はとくにタイの方が2人ほど見えていらっしゃいますが、実はタイは帝国主義時代に植民地化されなかった国ですね。ところが、植民地化もされた経験のないタイが、戦後50年後の今日になってみると、植民地化された国と同じような途上国の段階に留まっているわけです。その原因を簡単に言えば、近代合理主義をタイはまだ手に入れてないが、日本は開国と同時に非常に熱心に必死になって近代合理主義を入れたということの差が出てきた結果じゃないかと思うのです。

また、プラティープさんがやっていたら財団の話をお今日は初めからずっと聞かせていただいたわけですが、プラティープさんのような方の活動は途上国のあちこちにずいぶんあります。ところが活動を進めていくうちに、結局、援助資金をいただくための団体に変質してしまっているような事例はあちこちに多いわけです。これを防ぐためにも、プラティープさんの財団はやはり合理主義に則って運営されなければならないのではないかと思います。

それから先ほど草野さんがおっしゃったように、途上国では、腐敗の問題が決定的なんです。実は日本が世界銀行からお金を借りて、先ほどお話があったようなインフラの整備を行なったときには、腐敗というの

はまったくありませんでした。というのも、合理主義が徹底していたからなんです。

今後、途上国への経済協力では、とくに腐敗と合理主義というものを中心に置いて考え直さなければいけないと思うのです。これをわれわれは忘れてはならないと思います。途上国では、合理主義はいやだと言う人たちもいますけれども、しかし何をおいても合理主義が途上国に定着しないかぎり、今日のようなシンポジウムが、これからまた、50年も100年も続くんじゃないかと思っています。

○黒田：ご意見、ありがとうございました。まだ1分ぐらいございますけれども、プラティーブさん、いかがですか、もし今のご意見に対してご発言がありましたら。

○プラティーブ：先ほども言いましたように、調整の必要な分野もあります。政府間の協力だけでは不十分です。今日では、多くのNGOの人たちが私たちと仕事をしています。NGO同士の協力です。政府とNGOの協力という形も考えられるかもしれません。実際にはむずかしいようですが、政府とNGOが共に仕事をするケースを、ぜひ見てみたいと思います。ありがとうございました。

○黒田：ありがとうございました。

手が挙がっていますね。ご質問をどうぞ。

○質問：私はバングラデシュから来ましたが、日本に長く住んでいます。今日のシンポジウムについて一言、感想を申し上げたいと思います。

まず、内容がちょっとお祭り騒ぎっぽくなったかなと思いました。それから進行については、何を議題として取り上げるのかの焦点が絞りきれなかったために、時間がロスされたと思います。たとえば環境問題の話が出ましたが、環境問題って、ちょっと取り上げて今日だけで話ができるような単純な問題じゃないんですね。ちなみに、今日私がここに来たのは、環境問題を話し合うためではなくて、いま現実にODAでは何ができるのか、これまでのようにできないとすればなぜできないのか、そういう問題を話し合いたかったんです。シンポジウムの目的は、インタラクティブに話し合うことだと思います。パネリストの方たちの意見をただ聞いているだけでは、私自身としてみれば、時間の無駄遣いだと感じてしまうわけです。もう少し効率的な進行を望みます。

それから、今日参加してよかったなと思ったのは、プラティーブさんと奥田さんから、貴重な税金を使わせていただいて、という言葉が聞けたことです。そういうふうを考えている人には、もっともっと活躍してほしいと思っています。

ちょっと辛口の感想になってしまっていて、申し訳ございません。

○黒田：今日は国際協力について考える日、ということで、何を取り上げるにしても、1日だけでは語り尽くせません。本当にしばらくの時間でございましたけれども、ご清聴ありがとうございました。(拍手)



平成9年「国際協力の日」記念国際シンポジウム  
「ひとの役に立つということ」～国際協力の原点を探る～

---

平成10年1月14日発行

発行者

国際協力事業団	海外経済協力基金
〒151-8558 東京都渋谷区代々木 2-1-1 新宿マインズタワー	〒100-0004 東京都千代田区大手町 1-4-1 竹橋合同ビル
電話：(03) 5352-5058	電話：(03) 3215-1419

©1998 国際協力事業団／海外経済協力基金

この印刷物は再生紙を使用しています。



**JICA**  
国際協力事業団  
Japan International Cooperation Agency

**OECF**  
海外経済協力基金  
The Overseas Economic Cooperation Fund, Japan

